

# 小学校社会科教科書の 内容分析 ー多文化社会日本を探るー

恒吉僚子  
ヨシイ・ラファエラ  
上原菜緒子  
恒吉藍

一般社団法人グローバル  
多文化社会研究所

2024年1月

## 小学校社会科教科書の内容分析 — 「多文化共生」の意味を探る —

恒吉僚子&ヨシイ・ラファエラ&上原奈緒子&恒吉藍

### Abstract

#### A Content Analysis of Elementary School Social Studies Textbooks: Examining the Meaning of “Multicultural Coexistence”

Tsuneyoshi, R. & Yoshii, R. & Uehara, N. & Tsuneyoshi, A. (2024)

Issued by the Global and Multicultural Society Research Institute (Tokyo, Japan)

This paper is based on a content analysis of elementary school social studies textbooks (grades 3-6) in use in the school year 2023, published from two major textbook companies in Japan. This is a follow-up study of a content analysis conducted on elementary school social studies textbooks in 2007. Textbook content of key words or categories were analyzed. The terms/categories were, “foreigners,” foreigner/immigrant/refugee of any country or ethnic group, “foreign,” any foreign country or nationality name, “immigrant,” “refugee,” “race,” “ethnicity,” “minority,” “abroad,” any word that signified that it was outside of Japan, “international,” “nationality,” “global,” “multicultural coexistence,” “coexistence” such as in relation to racial/ethnic, physically or mentally challenged, gender, disparities in communities, coexistence with nature, the elderly, sexuality, and disparities, etc. The paper analyzed the contents in light of their depiction of multicultural coexistence (*tabunka kyosei*). The analysis suggested that the overarching narrative of the Japanese elementary social studies textbooks had not changed. Nation and nationality were used as the major dividing factor (not race/ethnicity), leading to a portrayal of multicultural coexistence between the dichotomous categories of “Japanese” and “foreigners.” The recognition of the diversity within Japan is weak, since the narrative supports an outward looking perspective of international exchange, international friendship, and international cooperation between “Japanese” and “foreigners.” 4 patterns in which “foreign” or “foreigners” were mentioned were identified (e.g., pattern 1 involved showing how Japan and foreign countries were linked through imported products). Though in reality, Japanese society is diversifying, and calls for recognizing multicultural coexistence in society, have been set forth from many sectors (including the business), Japanese elementary school textbooks have yet to shift their narrative to encompass the changes, and to prepare the next generation to productively live in a society that is multicultural.

Key words: Japanese textbooks, social studies, multicultural coexistence, content analysis

## 問題提起

教科書は教育の実践においてその内容を方向付ける重要な役割を担う。こうした教科書の性質から、各国で教科書、特に社会規範や歴史観が反映されやすいとされる社会科・歴史教科書の記述をめぐってしばしば激しい論争、「文化戦争」(cultural wars)が行われてきた(Hunter, 1991)。

教科書は従来、国民教育の道具として、その国の国民がどのような知識やスキル、価値を身につけることが好ましいとされているかを反映してきた (Delfattore, 1992)。社会・文化・歴史的文脈において何が主たる争点になるかは異なるが、教科書は次世代の「国民」が学ぶべき内容を示すものとして、しばしば象徴的な意味を持ってきたのである。

こうした視点から日本の 2023 年度使用された小学校社会科教科書を見るとどうなるのか。多文化社会日本の視点から見た場合、日本の社会科教科書はどのようなナラティブとなっているのだろうか。

筆者は 17 年前に主要二社の小学校社会科教科書を分析した。その結果として、まず、「多様性」に関してであるが、教科書は民族多様性は意識していないが、職業等の他の多様性を意識していないわけではないことが示されていた。具体的には、職業や地域等に関しては「多様性」が教科書全体にわたって意識されている。ジェンダーの違い、障害の有無もキャラクターが意識的に男女が交互に現れたり、写真においてもそれらが意識されていることがうかがわれる。

それに対して民族的背景の異なる人々はその民族文化の特徴は意識せずに、概して「外国人」として表現されていた。6年生の「日本史」を扱う部分を除いた、現代の日本社会を扱ったところでは、「外国人」は一時的に日本に来て去る客人、例えば、学校を訪問する海外の視察団、街の外国語の看板が象徴する新しい来日「外国人」などである。一方、6年生前半の「日本史」を扱う部分では、二つの歴史的に差別をされてきた集団「在日韓国朝鮮人」と「アイヌ人」が名称を特定された形で、女性解放等の人権問題と共に、差別の問題として登場していた。そして歴史分野の扱いが終わり、6年生後半の「現代」の問題に話題がもどる時には再び「外国人」は一時的客人のことを指すようになっていた (Tsuneyoshi, 2007)。

しかし、この時か点から十五年以上の歳月が過ぎ、日本社会では十五年前には「外国人」と総称されていた人々の一部は定住化が進み、地域は多国籍化している。国際結婚家庭の子どもが増加し、本人は日本国籍だが親等の祖先の出身が日本以外の国である人々も増加している。それに対応し、「外国につながる」「外国にルーツ」をもつ子ども、移民二世等の名称も多様化している (清水他, 2021)。

一方、日本が少子高齢化によって人口減少社会となり、「外国人」との共生、「多文化共生」、は行政文書でも散見されるようになってきている (総務省, 2006; 2020)。文部科学省、総務省等でも日本の代表的なニューカマー、「日系人」関係のリンク、動画を出すようになってい

る(1)。「日本人」は減っている一方、「外国人」は増えていることがデータによっても示され(総務省統計局, 2024)、各国で「外国人」人材の獲得競争が進み、「外国人」政策の整備や「外国人」に選ばれる日本となるべきだという提言が経済界からも出るようになっている(日本経済団体連合会, 2022)。他方では、国際的には移民や庇護申請者をめぐる論争は、政権の行方を左右するものとなっている。

こうした日本内外の変化の中で、小学校社会科教科書はどのように多文化社会日本、より一般的な用語を用いれば、「多文化共生」を描いているのか。多文化社会としての日本は文化的多様性を尊重し、民族、国籍、ジェンダー、障害、年齢等による文化集団間の社会的公正を実現しようとする社会である。日本の「多文化共生」の意味は、「外国人」との共生を意味することが多いが(Tsuneyoshi, 2019)、本論文では国際的な議論で一般的な、諸文化集団を含む形で「多文化」を考える。

本論文では、2007年に分析した二社、A社、B社の2023年度現在使用されている1-6年生までの小学校社会科の教科書を用いた分析からこの間に接近する。本論文は、一般社団法人グローバル多文化社会研究所の多文化社会日本の内なる多様性についての理解を深めようとする「見える化」プロジェクトに関連している(2)。

### 先行研究からの問題提起

教科書、特に社会科・歴史教科書における「国民」の物語、ナラティブ、をめぐっては、しばしば政治化され、熾烈な論争が行われてきた。「文化戦争」の一環を占める移民社会アメリカの歴史教科書の内容分析は、教科書に描かれてきた内容や描かれ方が社会問題化してきた象徴的な例である。

1960年代、アメリカは公民権運動、ベトナム反戦運動の盛り上がり等、社会の価値観を揺るがすような様々な出来事を経験した。1950年代までのホームドラマで見られた理想的家族、女性は専業主婦、男性は大黒柱の性別役割分業観、白人中心の「国民」観、自明だと思われていた価値観が挑戦されるようになったのである。アメリカの歴史教科書について、ある論者は次のように表現している。1960年代までは。

表紙をめくればアメリカは完全だった：世界で最も偉大な国、民主主義、自由、テクノロジーの進歩の具現…(FitzGerald 1979, p. 10)

であった。そして、歴史教科書の中では、アメリカはその根幹においては何ら変わっていないというナラティブが支配していた。そのナラティブの中では、アメリカ革命以来、アメリカ的価値も政治制度も一貫していた。こうして、50代に子どもだった世代にとっては、当時の教科書は一貫したストーリーを貫きほころびもなく、そこで描かれた世界は「永久」に続くものと思われた (FitzGerald 1979, p. 10)。

だが、それに続く1960年代の激動の時代を経てアメリカの教科書は変わった。「科学的進歩」と「大統領の就任」に象徴されていたかつてのアメリカ史の物語、ナラティブは、人種問題、都市問題、外交政策問題、公害、貧困…というように、色々な絡み合う問題群として描かれ、「進歩」は「変化」に置き換えられたのである (FitzGerald 1979, p. 11)。そして、「我々アメリカ人」と「移民」を区別して前者が白人アメリカ人の写真で象徴されていたのが、「移民社会アメリカ」のアイデンティティで多様性が描かれるようになってゆく (FitzGerald 1979, p. 82)。

アメリカの例にも部分的に示唆されているように、ある国・社会で発信される価値観が大きく変わる時は、植民地支配勢力による宗主国の教育の強要、軍事政権による教科書内容の変更、敗戦による教科書の書き換え、つまり、国内外の力関係が劇的に変化した時である。そこには、教科書の統制が誰によってなされているのか (例 国定、検定、民間)、誰が採択に関わるのか、利益団体や政治、民間、市場もまた絡んでいる。

いずれにせよ、アメリカの歴史教科書が1960年代に人種・民族をはじめとするマイノリティの記述と彼らを肯定的に描くことが求められ、劇的に変化したとする前述のような声があるのに対して、国民国家としてのアメリカの発展のストーリーの中にマイノリティが取り込まれてゆくだけだとする声もある。ここでは、自由と進歩の物語としての国民国家アメリカの「集合的記憶」 (collective memory) 作りのための歴史教科書であり、歴史家が重視する、新しい歴史的発見を敏感に反映するのが役目ではない。アメリカの発展のナラティブは簡易化され、一貫した形で提示され、“アメリカ人ならだれでも知っている” ナラティブとなる。こうして、ナラティブを構成する特定の人々、ワシントンであり、リンカーンでありが集合的記憶として刻み込まれ、多様な民族集団もそのアメリカ国家の発展の物語に位置付けられてゆくと言う主張もある (VanSledright 2008, pp. 124-125)。つまり、教科書は多様なマイノリティの物語を次々と加えたかもしれないが、それらは「アメリカ」の発展のナラティブに組み込まれ、ナラティブ自体を大きく変革させたわけではないということである。

さて、17年前に筆者が前述のように分析した日本の小学校社会科教科書における「外国人」をめぐるナラティブは、6年生の歴史部分とそれ以外の現代日本の部分とで異なっていた。歴史部分においては、内なる「外国人」として、在日コリアンとアイヌ民族が人権枠組みで他の差別される集団と共に特定される形で語られていた。基本的に外国から学び（最初は中国と朝鮮半島、鎖国の時にオランダ他）、不平等条約と近代化で欧米から学んで近代制度を作り、不幸なアジアとの戦争、戦後の平和国家と国際貢献、のような、受験でも試されるナラティブの流れになっていた。一方、3、4、5年と6年の後半の「現代」の部分は「外国人」は基本的に海外視察団のように基本的に出身国に帰る人たちがイメージされていた（Tsuneyoshi 2007）。

しかし、前述のように、この二十年弱の間に様々な社会の変化が起きている。日本は少子高齢化社会として生産労働人口が減ってゆく社会であり、前述のように、行政も「多文化共生」を推進、経済界からも「外国人に選ばれる日本」になる必要性が問われたり、移民二世や国際結婚家庭の子ども等、定住化しながら日本社会の一員として生きている異なる民族・文化的背景を持つ若者・子ども達が増える社会となった。

小学校社会科と「多文化」共生や教育についての研究においても、それ以前に比べて2017年告知の学習指導要領でグローバル化、国際化の記述が増えたこと（柳, 2023）が指摘されている。しかし、研究者や教員によって、教科によってバラ付きがあること、例えば、中学校地理の教科書では「ブラジル」が増えているものの、歴史教科書ではまだ日系移民史がないこと（3）、アイヌ民族、日系人等について、既存の日本史に付加する形ではない形での統合を模索している研究も出ている（森茂&中山編著, 2008; 森茂&中山, 2011; 中山, 2012; 藤原, 1994）。

こうした中、日本の小学校社会科教科書における多民族間、いわゆる「外国人」と「日本人」との共生をめぐる語りはどうなっているのだろうか。17年前からの変化を踏まえながら、これからの日本や世界を生きる子ども達求められる多文化が共存する多文化社会日本での共生について、考える示唆を得たい。

## 方法

2007年度に分析した主要な小学校社会科教科書会社の教科書二社の2023年度の教科書について、3年から6年の教科書の記述を、「外国人」、特定の国や民族の外国人・移民・難民

(例 在日ブラジル人、インドシナ難民)、「外国」、特定の外国名・国民名(例 スペイン人)、「移民」「難民」「人種」「民族」「マイノリティ」、「海外」「国外ないし国内外」というような国の外を示す言葉、「国際」「国籍」「グローバル」「多文化共生」「共生」(民族・人種、障害の有無、ジェンダー、地域格差、自然との共生、高齢者、セクシュアリティ等による格差)の言葉が出てくるところを分析した。これを通して、多文化社会日本、いわゆる「多文化共生」について、異なる民族・人種・文化的背景の人々が共生する社会の提示について考察した。以下に見るように、これらの語の記載自体が少ない。

### 学年ごとの教科書内容

A 出版、B 出版の二つの小学校社会科の 2023 年現在使用されている 3 - 6 年の教科書を、それぞれの教科書にそくして分析した。

### 分析資料

前述のように、文中のキーワード「外国人」、特定の国や民族の外国人・移民・難民(例 在日ブラジル人、インドシナ難民)、「外国」、特定の外国名・国民名(例 スペイン人)、「移民」「難民」「人種」「民族」「マイノリティ」、「海外」「国外ないし国内外」というような国の外を示す言葉、「国際」「国籍」「グローバル」「多文化共生」「共生」(民族・人種、障害の有無、ジェンダー、地域格差、自然との共生、高齢者、セクシュアリティ等による格差)の言葉が出てくるところを分析した。

#### A 出版社 3年

登場人物：ももかさん、さきさん、あいりさん(女の子三人)、はるきさん、かいとさん、そうすけさん(男の子三人)(見かけは全て「日本人」で交互に書いている)

1、2年は生活科であり、「まちのすてき」として紹介している。ここにおいては一般論と

して自分達が作った地図や子供たちがメモしながら地域の人を取り囲んで聞き取りをしている姿が写真になり、見たいは「日本人」である。一方、ページの横でコメントするキャラクターは**男の子と女の子を交互に描写して明らかにジェンダーのバランスは意識されている**ことがわかる。学校のまわり地図を使いながら調べたり、市についても同じように調べたりすることを求められている。「学習の進め方」では方法論が説明され、「つかむ」に続いて、調べる方法として体験的学習、手紙で質問する、図書館利用、インターネットで集めるがあげられ、それを、まとめて「いかす」ことを求められている(p.19)。

⇒筆者分析：マレーシアの教科書の民族の代表をキャラクターで示したり、アメリカのように教科書にマイノリティの写真を載せるような、「外国人」移民、難民はキャラクターとして意識されていない。障害者、高齢者は福祉や介護などを中心に時々掲載(以下)。キャラクターでは子どもの男女を同数描くという、ジェンダーは意識されている。

「外国」が出てくるところは非常に少ないが、「外国」と従来からつながり、「にぎやかで自然もいっぱい」とされる福岡市を自分の「まち」をまとめる例として出している (p. 31)。「こんなときどうする」カードを「いかす」のところ  
で例示しているが、そのカードの一つに「外国人のお客さんをあんなにする」と感想が出てくる (pp. 32-33)。

⇒例として出てくる地域が「外国」とのつながりが強い場合にはこうして「外国人」「外国」が出てくる。基本的に「国際交流」の視点だが、上記のように日本国内の「外国人」に触れる場合は外国人観光客を想定している場合が多い。外国人労働者は野菜の収穫や工場のように多く働いていると思われる労働の場でも触れられていない。少子高齢化でもロボットとつなげ、外国人労働者とは結ばれていない。

「1 工場の仕事」(p.52)においては、福岡市が例として取り上げられ、お菓子作りの話題において、原料を外国から輸入する (p. 59) で商品を通して「外国」が出てくる。「2 店ではたらく人」(pp. 66)でも、「品物はどこから」で海外の地図が出てくる (pp. 80-81)。障害者に関しては、車椅子や買い物の手伝いをする「コンシェルジュ」が出てくる (p. 85)。

⇒パターン1. =商品・ものを通して「外国」とのつながりを見せる。障害者はボーダーレスなど、意識して触れている。

最後にまとめる作業があるが、壁新聞の紹介がされ、コンビニ、商店街等の色々なタイプの「お店」が紹介されている (pp. 88-89)。「外国人」は登場しない。この他にも消防士、警察、地域での安全なまちづくりの活動などの暮らしを守る人々の話が紹介される。最後に地域の移り変わり、歴史的な視点が紹介される。基本的に自分達の周りを理解するのが趣旨であり、いずれも「外国人」は紹介されていない。しかし、地域に「外国人」が多かったり、東日本大震災の時のように「外国人」への情報提供が問題になったように争点になっている地域が例として取り上げられた時には「外国人」への言及がありえると思われる。

⇒教えるテーマ (例 自然を生かす) があり、それを例示するための地域が取り上げられる。その地域に国際性があれば「外国人」に触れる。パターン2=地域例の特色として国際、外国に触れる。

## A 出版社 4年

登場人物：ももかさん、さきさん、あいりさん (女の子3人)、はるきさん、かいとさん、そうすけさん (男の子3人) 見た目は「日本人」

4年生は最初のごみの分別や水、下水処理、災害、ひなん所などの話題が続き、災害のところ市役所の人  
の発言として「多言語に対応したスマートフォン・アプリ」についての記載がある (p. 97)。次の「1 残したいもの 伝えた  
いもの」では県の伝統・文化が話題となり、松山市を例に外国人観光客への言及もある。「外国のガイドブックに道後温泉がしょうかいされたので、世界中からお客さんが来るようになりました」と旅館でのインタビューが記載されている (p. 104)。

基本的に地域を例としているために、取り上げる地域の特徴によって例示される内容自体は違うことになる (大半が社会内の「外国人」外の「外国」にも言及していない)。その中で、唯一「外国人」が多く登場するのは「2. 国際交流に取り組むまち・仙台市」(pp. 150-157)である。「国際姉妹都市」「国際友好都市」で「外国人」との「国際交流」、「留学生交流」、外国人住民と日本人住民の「共生」へと結びついている。

⇒パターン2. =地域例の特色として国際、外国に触れる。外向きの国際交流、国際親善。

「3. 美しい景観を生かすまち・松島長」(p.158)では、仙台市のように国際性を特色としているのではなく、「景観」に着目しているが、今少しづつ増えたとされる「外国人観光客」への言及がたびたびなされている (pp.162-165)。次の宮城を例とした「景観を生かしてゆく」においても、外国人観光客が増えていると書かれている (p. 172)。3年生同様、方法論として、「つかむ」「調べる」「まとめる」のサイクルで理解が深まることが期待され、調べるにおいてはメモパッドを持った男女混合の小グループが協力している姿が描かれている。キャラクターが疑問を投げかけたりする場合も男女が交互に来る等の平等に描こうとする配慮がなされている。

⇒日本の中の「外国人」の例は観光客が多い。



## A 出版社 5年上

登場人物：ゆうなさん、めいさん、あおいさん、ひろとさん、こうたさん、りくさん（女の子3人、男の子3人）

「1 世界の中の国土」で地図を示しながら世界地図の中の日本、地図の調べ方、緯度と経度と共に示している。そこからより日本に焦点をあて、領土をめぐる問題、(pp.8-15)。部分的に「水害とたたかってきた人々」で「服部さん」の話として明治時代に来た「オランダの技師」への言及がある (p.26)。

⇒パターン3 日本の特徴を見せるために比較目的で外国のデータが使われる。図表などで。

「5 あたたかい土地のくらしー沖縄県」ではあたたかい例として沖縄県があげられている (pp.48-55)。その中に「調べる」のところでは沖縄県と外国人観光客、基地、アジアからの影響や世界各国への沖縄からの移民を示唆するところがある。具体的には「外国人観光客」も増えている (p.52)、とある。コラムで「アメリカの軍用地」について記述がある (p.53)。沖縄の文化について、古くから「アジアの国々」との貿易や交流 (p.54)、コラムで「世界じゅうから沖縄県出身者が集まる大会」についての言及があり、日本から海外への移民は示唆されている (p.55)。

⇒パターン2. 日本（沖縄）から海外へ移民として行ったことは意識されている。しかし、日本への移民、定住する「外国人」、国際結婚の記載はされていない。視点が外向き。

日本社会が抱える課題を例示するために、諸外国と日本が入ったデータ（グラフや地図）が使われるのが目立つ。例えば、「4 これからの食料生産とわたしたち」の「食料自給率」のカナダ、フランス、アメリカ、イギリス、日本のグラフで日本が一番低いのが示されている (p.115)。「3 水産業のさかんな地域」でもまた、日本が世界でどの位魚を消費されるかをノルウェー、日本、中国、フランス、ロシア、アメリカと比較している (p.96)。なぜ日本では魚が多く食べられるのに漁獲量は減っているのかという問を女の子のキャラクターがしている (p.97)。「調べる」では「日本の水産業がかかえている課題」として、世界地図で日本の漁業地域が示され、200海里水域の影響、漁場の環境悪化、乱獲、外国からの安い魚の輸入とか、養殖や栽培漁業に取り組む必要がある、後継者不足も触れられている (pp.106-107)。

⇒パターン3

「5 寒い土地のくらしー北海道」でも「世界に知られるイベント」として雪まつり、「観光客」に「札幌市役所」の人（男性）の話としてコラムで出している (p.59)。地域の例を出して、海外につながるパターンの一つとして、観光客から海外に触れるパターンである。北海道の事例で「調べる」では、「アイヌ」の文化について一ページ触れている (p.62)。

⇒パターン2 日本の中の「外国人」の例として観光客が使われている。北海道の場合だけ、マイノリティであるアイヌに言及される。沖縄の米軍基地の存在、アジアの国との交易、と同じで、北海道、沖縄の特色として抜かせないと考えられていると思われる（他の教科書でも触れられる）。

「1 くらしを支える食料生産」のところには、モノ、商品を通して海外につながるというパターンが見られる。男の子のコメントとして「外国から来た食料品もたくさん売られています」 (p.68)、「やってみよう」では、「外国から来た食料品」として分類してみる案がコラムで出ている (p.68)。

⇒パターン1. 外国人労働者が収穫に参加していると思われるが、「爛恋村」のキャベツの例を取り上げているようなところに外国人労働者は出てきていない。

## A 出版社 5年下

登場人物：上と同じ

商品を通して世界とつながるパターンが所々見られる。⇒パターン1.

「世界とつながる自動車」、車の現地生産 (pp. 18-19)、世界有数の鉄の輸出国 (p.27)、日本は石油のほとんどを輸入 (p.28)、国別輸入先 (p. 29)、「工業生産」と輸出入/貿易 (p.37)、「日本の輸入の特色」で「調べる」にもあり、鉄鉱石、天然ガス、というように製品ごとに**円グラフ** (p. 40)、輸入品の割合の**帯グラフ**でグラフを比べたりできるようになっている (p. 41)。「日本の輸出の特色」機械製品が主役、アメリカ、中国に (p. 42)、現地生産 (p. 43)。日本の貿易を理解するために自動車を例としている。原材料を輸入して製品を輸出 (p. 45)。「調べる」「日本の工業生産の課題」で輸入に頼っている、現地生産が増えている、国内で作ったものが売れない (p. 52) などを経て、**ロボット活用**の話に。

⇒パターン1. また、ここでは、例示による特色から「外国人」(国内)につながりうるどころ。例示によって海外、外国との交流につなげられているが、国内の「外国人」にはつなげていない。国内の「外国人」については、一時的な「外国人観光客」に触れている。工業生産も「外国人」労働者にはつなげていない。P.79 コンビニの店員がコメントするところも、実際は外国人が多く、「外国人」につなげられるであろうが、日本人である。

「1 情報産業とわたしたちの暮らし」では、外国などの情報も放送される。こうした記述は上記もそうだが、**子どもが話す形**で書かれている (p. 59, p.63)。「広げる」「調べる」「情報を生かす観光業」では、「外国人向けのホームページ」について、**観光協会**の人の話として出ている (p. 87)。⇒「外国人」は**観光客**、外の「外国人」

他では「外国人」は出てこないが、「情報を生かす**福祉産業**」では**高齢者**が、更に災害、東日本大震災などが出てくる。⇒**福祉の話では高齢者。他には障害者。**

諸外国と比較するデータとして海外が出てくる、日本の製品のよさを説明する形で外国が出てくる。

「日本の造船は…高い技術で世界的に評価されています。日本の建造量は、中国、韓国について世界3位」(p. 24)、日本の石油製品は世界トップクラス・「調べる」石油製品の作り方 (p. 29)。工業について「調べる」では、高い技術を評価され「外国」からの注文も来る大田区の中小企業の例も出てくる (p. 50)。

⇒パターン3のもとでのヴァリエーション。日本の得意分野を示すための諸外国データ (諸外国データの中の一つ)。

## A 出版社 6年 歴史編

**登場人物：既存のドラエもんキャラクターを使っているところが他と違う。タイムマシンの絵が冒頭にあり、それがあるからか。ドラエもん、のび太、しずかが出てくる。**

⇒最初、中国・朝鮮半島から進んだ技術を学ぶ

最初是中国から(時として朝鮮半島から)学ぶ話が続く。中国・朝鮮半島と交易をしていた (p. 17)、渡来人が来て進んだ技術を持ってきた (p. 21)、遣隋使・遣唐使・鑑真が来るなどの中国・朝鮮半島との交流と進んだ技術、律令、仏教の伝来(p. 24,25, 26, 27, 29, 31-33)、中国からの文化に影響されていたが、9Cには遣唐使もやめ、国風文化が出てくる (p. 39)、まとめではこうしたことをまとめている。

⇒次に中国・朝鮮半島だけでなくヨーロッパから文化が伝わる キリスト教、鉄砲

続いて武士の世の中になる。「4 武士の世の中へ」(p. 44)。元寇(pp. 52-3)。義満は中国(明)と貿易 (p. 56)。雪舟で水墨画を学び、帰国した雪舟 (p. 58)、墨絵 (p. 59)、室町時代には茶の湯や生け花も広まり、それが今では「外国人にも親しまれています」(観光客を指していると思われる)とある (p. 59)。「まとめる」でも生け花が外国人に親しまれていることが繰り返されている (p. 61)。「鉄砲」も「外国」から入ってきた (p. 85)、キリスト教の伝来との関係で天将の少年使節のコラム、「調べる」で「外国とのかかわり」がある (p. 67)、「ヨーロッパ人の来航」ではスペイン、ポルトガル、宣教師や貿易船、ザビエルとキリスト教伝来、添付の伝来 (p. 68)、南蛮貿易 (p. 69)、織田信長「ヨーロッパから伝えられたキリスト教を保護し」の話 (p. 71)。江戸時代のところに「蘭学」や国学、歌舞伎などが一緒に書かれてある (pp. 90-91)。「仏教や儒教などが中国から伝わる前の日本人がもっていた前の考え方を研究しようとする学問(国学)」が広まった (p. 96)。

⇒江戸時代の差別(同和問題が想定されていると思われる)

江戸時代の差別(外国でないが、マイノリティに関係)。百姓や町人とは別に「厳しく差別されてきた人々」がいると書かれてあるが、具体的には何も書いていない (p. 83)。

#### ⇒鎖国の中でも続いた交易

キリスト教禁止（踏み絵、天草の乱、徳川家光、オランダと中国に限り貿易船の出きを許す、長崎には出島や唐人（中国人）の屋敷、朝鮮通信使―朝鮮と対馬藩（p. 85）。

#### ⇒明治維新と西洋化

「9 明治の国づくりを進めた人々」では、西洋化、文明開化の様子が描かれている（pp. 102-103）。ペリー来航（p. 104）、アメリカとの日米修好通商条約、開国（pp. 104-105）。大久保らの欧米視察団、欧米に追い付いて富国強兵、「外国から機械を買い、技師を招き」殖産興業（p. 106）、文明開化、留学生派遣（p. 108-109）、コラムで明治政府が蝦夷地を北海道と改名してアイヌの人々の日本語で日本式の名前（p. 111）、琉球も領土として沖縄県にした（p. 111）。ドイツの憲法を学んだ伊藤博文（p. 112）。「まとめる」でも「外国との力の差」を実感したなどが書かれている（p. 115）。

「10 世界に歩みだした日本」では、不平等条約を撤廃して国際的に大きくなってゆく日本の様子が書かれている。

ノルマントン号事件と不平等条約を改正することの悲願（p. 116-119）、日清戦争、日露戦争（pp. 120-121）。韓国併合、植民地化で「朝鮮の歴史は教えられず、人々のほこりが深く傷つけられました」（p. 122）。条約改正、北里柴三郎の破傷風の治療などによって医学が国際的に向上、日本の国際的地位向上（p. 123）。女性の地位向上の運動で平塚らいてう、市川房枝、身分制度改正でも差別される人々、全国水平社（p. 125）。

「11 長く続いた線背負うと人々のくらし」では第二次大戦へと進んでしまった日本の歴史が書かれてある。広島の上原爆ドームから始まり、満州、第二次世界大戦「正しい情報は国民に知らされず」（p. 133）、疎開、「空襲で日本の都市が焼かれる」アメリカ軍の爆撃（pp. 136-137）、「原爆投下と戦争の終わり」アメリカ軍が沖縄に上陸、ソ連が不可侵条約をやぶって樺太南部、千島列島を責める、日本降伏、「台湾と朝鮮の植民地支配も終わり」（pp. 138-139）（pp. 130-139）。ここではもともとのキャラクターが文中で顔が書かれ、横にコメントが出ているスタイルがもどっている（p. 128）。

#### ⇒戦後、平和国家に

「12 新しい日本、平和な日本へ」では、アメリカなど連合軍による占領、戦後改革、男女平等の選挙権、9年の義務教育、学校給食も始まる、憲法（p. 144）、国際連合への復帰、朝鮮戦争、占領終わる、安全保障条約、「アメリカの協力」により産業回復（p. 146-147）、高度成長とオリンピック、国民総生産額がアメリカの次（pp. 148-149）、「変化の中の日本」で冷戦、バブル経済、不景気、少子高齢化、阪神・淡路大震災、東日本大震災、ボランティアを見開きにおさめる（pp. 150-151）「これからの日本を考えよう」で「日本は平和で豊かな社会を築き、国際社会の一員としての役割を果たしてきました」（p. 152）テーマを選んで調べる。例示としてコラムで、「アメリカ軍基地が残る沖縄」「アイヌの伝統文化を守るために」「まわりの国と日本」（pp. 152-153）。あとはまとめといかず（pp. 142-157）。こ  
こでもオリジナルキャラクター。

⇒この現代の部分は非常に少なく、これからの課題を羅列している。少子高齢化の話題はあっても外国人労働者や「多文化共生」の話は言葉としても出てこない。歴史の中で、南米への移民史と日本に外国人労働者としてその子孫も来ている話もない。

日本を誇りに思う「アジアで初となる」東京オリンピック（p. 148）、「日本の文化や技術は、世界で認められ、さまざまな面で世界にこうけんしています」（pp. 152）。

⇒パターン3のもとでのヴァリエーション。日本の得意分野を示すための諸外国データ（諸外国データの中の一つ）。

インバウンド観光客―日本文化を楽しむより。⇒観光客に注目。

#### ⇒軍事衝突はとりあげられる

元寇（pp. 52-3）。豊臣秀吉、中国（明）に軍を。死後、日本軍撤退（p. 73）。

#### A 出版社 6年 政治・国際編

**登場人物：**ゆうなさん、めいさん、あおいさん、ゆろとさん、こうたさんりくさん（女の子三人、男の子三人、見かけは日本人に見える）

冒頭のページは「公共の広場へようこそ」と「共生の世界に向かって」。「共生の世界に向かって」は「多文化共生」に関係するところ。写真は日本と他国の国旗を持っているスポーツトーナメント、海外（アフリカの教室で国際協力をしているように見える女性の写真、欧米に見える教室）、植林と思われる写真が掲載。

⇒従来から日本の国旗を掲げた国際交流・国際改善・国際協力イメージと自然との共生であるように見える。

国の政治、児童センター、基本的に特定の地域事例をとって、「川口市の福祉事業」(p.45)のようになっている。高齢者と障害者が入っている。東日本大震災についてもかなり枚数を割いている。いずれも最初のところには「外国」の話は出てこない。

「3 世界の中の日本」が(pp. 64)最も海外が出てくるところ。「1 日本とのつながりの深い国々」でアメリカ、大韓民国、中華人民共和国、サウジアラビアが挙げられ、ブラジルはここでは挙げられていない。アメリカの話では「人種・民族」のコラムがある。ここで、「ひろげる」「ほかにもある日本とのつながりの深い国を調べよう」とあり、インド新聞をつくったこうたさん (p. 98)、ブラジルレポートを作ったあおいさんのまとめが出てくる (p. 99)。ブラジルレポートでは、サッカー、大泉の町役場の方にお話をうかがった、祭り、料理、ブラジルのものを売るスーパー。(p. 99)。

⇒ここが一番海外の国を総合的に取り上げている。ブラジルが入りうる。外国の例、例えばアメリカでは「移民・民族」が出てくる。日本国内の問題として出てこない。

⇒この部分でブラジルの話から在日ブラジル人のスーパーへや行ける在日ブラジル人地域の人のインタビューもできる。

「世界の未来と日本の役割」では、(pp. 100- 110)地球課題の解決、国連、SDG s、日本の国際協力へとつながっている。⇒国際協力

## B 出版 3年 令和5年1月発行

**登場人物：**さくらさん、あおいさん（女の子2人）、ひろとさん、ゆうまさん（男の子2人）。見かけは全て「日本人」。生活科を振り返り、社会科へとつなぐ。

（「1 店ではたらく人と仕事」。「しょうがいのある人やお年寄りの人など、だれにでもりようしやすいくふう」を調べる (p. 53)、高齢者、障害者関係の写真も同じページにある。）

「商品はどこから」で国内だけでなく海外の地図がある (56-57)、「外国の原料の仕入れ先」(75)にも海外の地図に日本、アメリカ、カナダ、ニュージーランドが描いてある。また、作って、売ってという対象として、「しゅうまい」を選ぶことによって、「中華街」や外国とのつながりについて話すことが可能になっている (76)。

「農家」の話でも、農家の方の話として、種の話で国産だけでなく、アメリカ、韓国、オーストラリア産を用いていることが伝えられている (82)。

（2の「市のうつりかわり」のところでは「地域ケアプラザ」という公共施設を紹介し、「お年寄り」「障害者」を取り上げている (150-151)）。

⇒パターン1. =商品・ものを通して「外国」とつながっていることを意識させる。

## B 出版 4年

**登場人物：**さくらさん、あおいさん、ひろとさん、ゆうまさん（女の子2人、男の子2人）。見かけは「日本人」。

実際に「外国」が出てくるのは、自治会の活動に関連して、使われなくなった楽器を集めて海外に送る国際貢献・国際協力の例であり、写真には楽器を使うマラウイ共和国の子ども達の姿がある (46-47)。

⇒記載は今はないが、災害のところ、アジアや他の地域での災害に言及しうる。

地域のよさを生かすテーマで「ひろげる」とエンリッチメントのところで「日本のアニメのふるさと」として練馬区が例示され、フランスでのアニメ関連の写真がある (176-177)。

地域自体が「外国」と関係している例として、「3 国際交流がさかんなまちづくり」でキャラクターが「外国の人々が多くおとずれる地域は、県内のどこだろう」と問題提起している。例示されているグループが調べ学習をするが、福岡国際マラソン、海外への玄関としての福岡空港と博多港、中国や韓国の近さ、八つの海外姉妹都市、交流について語られている (200-207)。

⇒パターン1.ものを通しての外国とのつながりが多い。「外国人」観光客に言及。

## B 出版 5年

登場人物：さくらさん、あおいさん、ひろとさん、ゆうまさん (女の子2人、男の子2人)

「1 日本の国土と世界の国々」では世界地図があり、ワールドツアーをしている。イギリス、フランス、ドイツ、エジプト、サウジアラビア、ガーナ、ロシア、中国、インド、タイ、南アフリカ、オーストラリア、ニュージーランド、カナダ、アメリカ、メキシコ、ブラジル、ペルー、アルゼンチン、そして日本が描いている (pp. 8-11)、さらにアジアの中の日本、領土などが扱われている (pp. 12-17)。⇒パターン2.

「3 自然条件と人々の暮らし」の中で沖縄が取り上げられ、観光のところで国内外の観光客への言及がある (pp. 30-31)。同じように「北海道で国内外の観光客とアイヌ民族 (pp. 44-45)、北海道と隣接するロシア連邦と日本の関係についてのコラム (p. 49)、「ひろげる」では「自然とともに生きる人々のくらしーアイヌの人たち」(pp. 56-57)で川や海、山や森、さけ、カムイ、文化を伝えてゆく、が語られている。

⇒パターン3.例を通して。やはり観光客。同時に沖縄でアイヌ人が出てくる。

「2 水産業のさかんな地域」の中で外国からの輸入、水産資源の管理、持続的な海のめぐみについての言及がある (pp. 92-95)。「3 これからの食料生産」で「どれほどの食料が、外国から輸入されているのでしょうか」で地図でノルウェー (さけ・ますなど)、中華人民共和国 (まぐろ、野菜など)、タイ、台湾、フィリピン、オーストラリア、カナダ、アメリカ、ブラジル、チリが出ている (p. 108)。また、食料自給率、地産地消などとの関係で輸入品も出てくる (p. 109-113)。「1 自動車の生産にはげむ人々」で車 (部品を含む) の輸出入 (pp. 129-130)、「まとめ」で少子高齢化と対抗する、環境にやさしい社会を作るなどと共に「外国からの観光客にも楽しんでもらう」(p. 137)が言及され、続く「2 日本の工業生産と貿易・運輸」(pp. 142-151)、「3 工業生産の今と未来」でも商品の生産地から外国につながる、海外生産、日本の工芸品が外国人にも好まれるなどが出てくる (pp. 152-167)。「少子化や高齢化が進む社会を支えるロボット」のコラム (p. 164)と中小企業の人で不足には言及されている。海外生産への言及はあり、インドの工場で働いていた人のコメントとして「言語や習慣の違う人たちと働く」話がある (p. 161)。

⇒今後社会内の多様性に言及する可能性のあるところとして、「少子化や高齢化が進む社会を支えるロボット」のコラム (p. 164)と中小企業の人で不足には言及されているもの、少子高齢化と人手不足という、「外国人労働者」と一般に議論されるところでも、「外国人労働者」には言及されていない。

⇒同上、海外生産への言及はあり、インドの工場で働いていた人のコメントとして「言語や習慣の違う人たちと働く」話があるもの (p. 161)、「外国人」(移民・難民はもちろんのこと)の記述はない。

「4 未来とつながる情報」でも、国内外の情報の発信 (p. 175, 184)、世界とつながる情報、観光客に生かす情報通信技術 (pp. 192-193)と「外国」「海外」「世界」にいくつかだけ文の中で言及がある (p. 195)。北九州市の例で「国際協力」(p. 234)が一言出てくる。いずれもそれぞれのカ所はほとんど書かれていない。

最後に「ひろげる」で「日本にある世界遺産」の写真がある (pp. 240-241)。振り返りの後に世界地図もある (pp. 244-245)。⇒パターン3

⇒日本と海外をつなぐのは世界地図の中の日本の国土、貿易 (商品)、そして「外国人」観光客、情報、というように、モノや情報を通して海外とつながる想定⇒パターン1、「外国」との貿易、「外国人」との交流、おもてなしなどの間接的な形が多い。また、例示によっても間接的に外国人支援の情報があり、「自然を生かす」の例としては、沖縄や北海道、国際交流が多い市や県もとりあげられ、大きなテーマ (自然を生かしたくらし)を示す地域性として外国と

のつながりが語られている パターン2。そのつながりで「アイヌ」が「ひろがる」のさらに進める学習として出てくる。

## B出版 6年

**登場人物**：さくらさん、あおいさん、ひろとさん、ゆうまさん（女の子2人、男の子2人）。見た目は「日本人」。

オリンピック、パラリンピック（pp.6-9）に続き、「だれもが使いやすいまちに」（pp.10-11）で**障害者の権利保障**を取り上げている。「すべての人が幸せに生きるために」（pp.18から）で「**アイヌの人たちや在日外国人、障がある人などに対する差別や偏見、男女の性別による差別も解消していかなければなりません**」（p.19）。「ハンセン病」「先住民族」「障害者」関係のコラムもある（p.19）。

⇒**人権視点からアイヌ、障害者も。**

以後、日本史のところまでに部分的に「平和を守る」で世界の人々と守る（p.21）、**少子高齢化、高齢者**（p.35, 40, 42, 44）、**外国の例（選挙制度）**（p.47）、北海道の例のところに「世界の都市の降雪量と人口の比較（札幌市）」の情報が多（p.56）や「**観光**」（p.61）の話が一言出てくる。

⇒**パターン2。データだけでなく外国の情報も。**

6年後半の「2 日本史」（p.64）のところはいたるところに「外国」への言及がある。それは、最初は中国への遣隋使などが学び、朝鮮半島からも影響を受け、その後は鎖国の中でもオランダなどと交易を続けた話から、明治維新のあたりで欧米列強と不平等条約、そして戦争とアジアへの侵略、戦後の平和国家としての再出発という流れとなる。

そもそも最初の米づくりの時から「**中国や朝鮮半島**」からの**移住者**によって「**米づくり**」が始まったこと（p.80）、「ひろげる」「世界との関わりー古代中国の歴史書にみる日本」で「東アジアで最も早く文明がおこり、文字が使われるようになった**中国**」の**歴史書**の中に日本が出てくる（p.87）。「2 大陸に学んだ国づくり」（p.90）で中国や朝鮮半島から影響を受けた話が出ている。中国への**遣隋使**（小野妹子）、渡来人と仏教などの**技術の移転**（p.93）、中国、朝鮮半島の**しくみ**（p.92）、8世紀の初めの中国（唐）から学んだ律令（p.95）、「海をこえた人やもの」で**遣唐使**、仏教を伝えに**鑑真**などや「アジアの国々の文化と日本」で東大寺の正倉院の品の中には中国を通してペルシャ（イラン）の影響、（pp.98-99）、「ひろげる」で「世界との関わりー**東アジアと日本**」和歌やかな文字など**日本独自の文化**と共に、漢字や仏教など、大陸からのものもあり、九州地方を例にした東アジア諸国の影響を見た（p.105）。13世紀になると中国を支配したモンゴル人が元を形成、「**元との戦い**」が登場する（pp.112-113）。同じような、大陸から学ぶ文脈で、鎌倉時代に**墨画**の技法が中国から伝わり、「雪舟が、これを日本ふうの様式に完成」させた話（p.118）、「まとめる」で「外国から日本にきた旅行者をおもてなしするつもりで」室町時代に生まれた文化について説明してみようというカ所がある、茶の湯などである（p.123）。

中国、朝鮮半島に続き、**ヨーロッパ**が登場し、「**キリスト教の伝来とヨーロッパの文化**」で**スペインの宣教師ザビエル**、**ポルトガルやスペインの商人の来日**、**ヨーロッパとの貿易で鉄砲や火薬、中国の生糸**などが伝わってことが書かれている（pp.130-131）。日本の戦国時代、16世紀、ヨーロッパで勢力を持つ**スペイン・ポルトガル**の支援を受け、キリスト教の布教が行われた（p.137）。秀吉と朝鮮に軍を送って死後に引き上げ（p.133）、徳川家康が**朝鮮に使者**を送り（p.135）、鎖国の間も**朝鮮、中国、アイヌ**（pp.147-148）への言及、「ひろげる」「世界との関わりーオランダ商館の人々」で江戸時代の**オランダと中国との貿易**が書かれてある。出島での様子も言及されている（p.149）。ついでに海外に言及するパターンで、小コラムのような形で、「**海をわたった浮世絵**」の話が出てくる（p.153）。「オランダ語の書物を通してヨーロッパの学問の研究（蘭学）が行われ」（p.158）、国学も発展した。武士と儒学（p.160）そして、19世紀に入ると「**イギリスやアメリカの船**」が日本沿岸に近寄ってくる話が言及されている（p.161）。「ひろげる」でも江戸にきたオランダ人の例があげられている（p.165）。

次に**明治維新後の時代**となり、**欧米**から学んで近代化しながら第二次大戦へと突き進み、そして戦後の平和国家として再構築するストーリーが展開される。

明治維新の最初から外国との関係が大きく変わったことに言及（p.167）、「**黒船が来た**」で**アメリカのペリー**の話、**不平等条約**（pp.168-169）、**倒幕**と外国勢力を排除したいという動き（p.170）**岩倉視察団**や**津田梅子**のコラム（p.172）に続き、「欧米の国々に追いつけ」（p.174）で**殖産興業**、**富国強兵**、**欧米をモデルとした近代化**（pp.174-175）、生活の西洋化、**文明開化**（pp.176-177）、「世界との関わりー海をわたった武士たち」で欧米やアメリカの留

学生などが「ひろげる」のコラムで取り上げている (p. 179)。「9 近代国家をみざして」のもとに「ノルマントン号事件と条約改正」でイギリス船ノルマン号事件、不平等条約と条約改正を求める動きなどやコラムでのトルコの軍艦エルトゥール号の遭難 (pp. 180-183, p.186) と続いている。ジェンダーに関しては「自由民権運動と女性」 (p. 185)、「与謝野晶子」 (p. 190)「平野らいてう」 (p. 195)とまばらに書かれてある。

これに続き、日清・日露戦争、留学したり、「関東大震災」の時の朝鮮人や中国人の殺害 (pp. 188-195)、まとめ (pp. 196-197)、「10 戦争と人々の暮らし」では爆撃を受けて「戦火に焼けた日本」とそこに至る満州事変、中国、アジア・太平洋へと広がる太平洋戦争、人々への影響、空襲、沖縄、広島・長崎と原爆 (pp. 200-213) とまとめ (p. 214-215) となっている。「ひろげる」には、アメリカから送られた人形 (1927) や命のピサを発行した杉原千蔵外交官の話がされている (p. 215)。

#### 以後が戦後

日本史部分の最後には「11 平和で豊かな暮らしをみざして」 (p. 216)、「焼けあとからの出発」「もう戦争はしない」で世界平和の願う、民主的な社会のしくみ、新しい憲法を経て、「東京オリンピック・パラリンピック」 (pp. 222-223)、そして、国際社会の一員として結び付きの強い諸外国や争点となるトピックをコラム式にまとめている「朝鮮・北朝鮮と日本」「中国と日本」「見解決の北方領土」「沖縄のアメリカ軍基地」、竹島の写真、朝鮮通信使の写真 (pp. 226-227)、「まとめる」でも平和条約や「国際社会に果たす役割を考える」でノーベル賞受賞者を紹介 (pp. 228-229) で日本史部分が終わる。

⇒戦後から現在まで歴史は他に比べて比重が非常に薄い。日本史部分には移民史や現代につながる日本の中の在日ブラジル人や外国人一般は出てこない。

最後に「3 世界の中の日本」という形で現在にもどってくる (p. 232)。「日本と世界」の導入 (pp. 232-233) の後に、6年社会科で最も在日ブラジル人とつながりが深い部分が出てくる。それは、「1 日本とつながりの深い国々」「日本とつながりのある国」としてアメリカ、中国、ブラジル、サウジアラビア (pp. 234-255) が取り上げられているところである。「さくらさんの楽手計画」として「ブラジルについて調べる」のもとに「調べること・ブラジルへの移住者を通じた日本とのつながり、・食事や人々の娯楽、調べ方・教科書やガイドブックで調べる、・インターネットで調べる」が浅草 (東京都) のカーニバルと共に書かれてある (p. 235)。

それぞれの国の記述があるが、ブラジルに関しては、「日系人が多く住む国 ブラジル」で、「さくらさん」が「ガイドブックやインターネットなどの資料」を使って調べたこととして書いてある。そこにはブラジルへの日本からの移住者、現在のブラジルの地図や鉱物、農産物、航空機技術などの産業を紹介した後に、先住民族の存在、ヨーロッパからの移住、アフリカから「多くの人が奴隷としてつれてこられました」、アジアからの移民も含めて「多民族国家」であると書かれてある (pp. 244-245)。はポルトガル語などの概要、日本人の移住、ブラジルの産業とかが例示されている。「日本とブラジルには、どのようなつながりがあるのだろうか」というような問を聞いているキャラクターもある、料理やカーニバルも紹介されている (pp. 244-247)。「次につなげよう」では「ブラジルの人々の暮らしの様子を調べよう」とある (p. 245)。食についても「フェイジョアード」が代表的な料理として紹介され、先住民の料理について言及されている (p. 246)。カーニバルと盛んなスポーツとしてサッカーがあげられている (p. 247)。そして、「次につなげよう」では、「日本から気候や文化の異なる国へ移り住んだ人たちは、とても苦労したのではないかな」 (p. 247)とある。「まとめる」部分でもブラジルの例も使いながら、整理例が書いてある (p. 252)。ここまでは海外の国の話であり、日本、ブラジル、というような国家名があげられている。だが、「まとめる」の最後に「多文化共生社会をともに生きる」というコラムがあり、国内における多文化共生の例として「在日韓国・朝鮮人の人々をはじめ、外国籍の人々」「近年では、外国につながる文化をもつ子どもたちも増えて」いる神奈川県川崎市をとりあげ、ふれあい館や外国人市民代表者会議が例示されている (p. 253)。

「ひろげる」ではやはり国家の枠組みで、「おとなりの国 韓国」が「ひろとさん」が調べた形で取り上げられている。日本と最も近い国の一つ、コンピュータの利用が盛ん、面積は人口、民族衣装やキムチ、韓国ドラマや日本のアニメの相互交流などである (pp. 254-255)。

最後に、「2 地球規模の課題の解決と国際協力」では、アフガニスタンなどで支援活動をした中村哲さんをきっかけとした日本の支援、ユニセフ、国際連合、地球環境と持続可能な社会、NGO や政府開発援助 (ODA)、国際協力機構 (JICA)、東日本大震災での各国の支援、平和の願い (マララさんや広島のコラム) と「まとめる」 (pp.256-271) がある。

⇒パターン4 国際社会の一員としての日本の国際貢献・国際協力

最後に見開き一枚で「6年生の学習をふり返ろう」とあり、1. ともに生きる暮らしと政治、2 日本の歴史、3 世界の中の日本がまとめとなっている。そして、「中学生になったら…」で以下のようにになっている。

地理 「日本と世界の全体を、さまざまな見方から、くわしく学習します」

歴史 「日本の歴史の各時代を、その当時の世界の動きにも目を向けながら、くわしく学習します」

公民 「政治や経済、国際関係など、現代の社会のしくみについて幅広く学習します」 (pp. 272-273)



## 考察

多様な民族、国籍等の人々が平等に共存する多文化社会日本の観点から見た場合、現行の小学校社会科教科書から何が言えるだろうか。

第一に、単に多様性の共存の観点から言うと、教科書には仕事、特徴のある地域等、多様性を意識し、それを肯定的に発信し、多様性自体への意識はある。色々な仕事があり、それぞれ工夫している。色々な特徴を持った地域があり、それぞれが工夫している。こうした多様性に関しては、日本の教科書は強く意識して肯定的なメッセージを発信している。

さらに、国際的に「文化的多様性」で取り上げられる民族や人種、ジェンダー、障害、年齢、地域、宗教等を軸にした公正で平等な共生に関しても、例えば、アイヌ民族、福祉・介護やバリアフリーに関連して障害者や高齢者、在日コリアンがそれぞれに登場するカ所がある（資料参照）。ジェンダーは子どものキャラクターが男女同じ数字で交互に登場している。これらの「多様性」に関しても一定程度意識されている。

第二に、しかし、前述の二集団以外の日本社会内の民族・人種多様性は「外国人」として総省され、さらに登場するところも限られている。17年前と比べて、外国人観光客への言及が増え、「ブラジル」が前よりは取り上げられるようになったものの、大きなストーリー、つまり、多文化社会日本のグランド「ナラティブ」は変わっていないことがわかる。以下により詳細に見る。

### 「現代」日本の理解

本論文で扱った小学校社会科教科書で「現代」を扱っているのが3-6年の内、6年後半の歴史を除いたところである。「現代」におけるナラティブとは、資料に見るように、「国際交流」「国際親善」「国際協力」、つまり「国・国籍」を軸として、「外国人」と「日本人」とを区別し、「外国人」は「外国」にいるか、一時的に日本を訪問している人々、「日本人」にとって国際交流、国際親善の対象であるか、国際協力の対象として捉えられているということである。

ここでは「外国人」「外国」をはじめとする前記語句の使い方は主として以下の四つのパターンで提示されている。パターン1は例えば、日本のスーパーで陳列されている外国産の商品

であったり、日本から輸出される車等の製品を通して日本と特定の諸外国とがつながっている  
ことを見せている。パターン2は、小学校社会科の教科書が暑い地域一沖縄、のように、特定  
の事例を通して語ろうとする時に、その地域の特徴の一つが「外国人」が多いとか、「外国」  
につながっているのをを使って「外国」とのつながりを見せている。例えば、取り上げた地域の  
事例で、観光客が増加していることを指摘することによって「外国」とのつながりを見せるよ  
うな場合である。パターン3は扱われているテーマ（例 食の自給率）に関して、日本のデー  
タをいくつかの国のデータと一緒に図表に提示して見られるようにする形で日本の特性を浮き  
彫りにするデータ比較のために外国を用いる場合である。パターン4は日本の国際貢献と結び  
ついて、開発途上国の国際協力を扱っているものである。

**パターン1 = 商品・ものを通して「外国」とのつながりを見せる。**

**パターン2 = ある地域の事例の特色として国際、外国に触れる。**

**パターン3 = 日本の特徴を見せるために比較目的で外国のデータが使われる。図表などで。**

**パターン4 = 国際社会の一員としての日本の国際貢献・国際協力。**

これらのパターンは、何か別の学習目的を達成しようとする中で外国とのつながりが付加さ  
れていることが多いことがわかる。例えば、お店の仕事を学ぶ際に、そこにある商品が外国か  
ら輸入したものである場合、それを通して外国とのつながりに思いをはせるようにする、とい  
うような例である。

教科書の文面においても、「移民」や「難民」の語は使われず、日本に住んでいる「外国  
人」の話もあまり出てこない。在日外国人と言っても多様だが、多様な国籍、民族、在留資格  
の人々を「外国人」と抽象化し、国籍によって、民族によって、ジェンダーによっても区別が  
されていない。例外が時々登場する「アイヌ民族」と「在日韓国朝鮮人」である。この二つの  
集団に関しては、他の「外国人」・エスニック・マイノリティに比べると意識して記載されて  
いることがうかがえる（資料1）。

日本の代表的なニューカマーであり、合法的に就労でき、永住・定住者が多い在日ブラジル  
人でも、「ブラジル」という外国は取り上げられても、国内の在日「ブラジル人」を「多文化  
共生」と結びつけることにはつながらず、「外国人」という抽象度の高く、国籍を軸とした言  
い方に吸収されてしまっている。B出版では日本と関係が深い国として「ブラジル」が取り上  
げられ、それに付随して「日本人」がかつてブラジルに移住して日系移民となった話は出てく  
るが、日本社会の中に在日ブラジル人コミュニティがあって、隣人として在日ブラジル人が日

本社会を構成していることへとつながってはゆかない。これは他のエスニック・コミュニティも同じである。小学校社会科教科書の本論文での分析から見る限り、そこには外向きのグランド「ナラティブ」があり、「外国人」は一時的住人、「外」の人であり、永住者であっても、日本国籍を持つ〇〇系移民であっても、「現代」日本社会のナラティブには位置付けられてないと言えよう。

### 日本の歴史でのグランド「ナラティブ」

6年生の終わりには日本史の部分がある。やがて、中学においては歴史分野として独立するもとなる部分である。

日本史に関しては、冒頭に、中国、朝鮮半島から米、仏教等が伝わり、遣隋使、遣唐使に見られるように日本から学びにゆき、渡来人、鑑真等、大陸からも日本に来て交流、交易している日本とアジアの相互の国際交流・国際親善、日本からの知識等を学ぶ国境を越えた借用の関係が出発点となる。海外から学びながら発展してゆくストーリーは続き、鎖国のもとではオランダ等との交易が続いたことが示される。しかし、ペリー来航、植民地化の危機の中で優れた欧米の技術を学び、追いつけ追い越せて岩倉具視視察団、津田梅子、色々な分野での近代化（例 殖産興業、鉄道等の近代的制度の設立）を推し進め、明治維新、文明開化というような日本で歴史を学んだ人ならば誰でも知っているストーリーが続く。その後は第二次世界大戦へと突き進み、韓国併合、侵略とアジア諸国に対して多大な苦しみをもたらしながら、原爆の投下、焼け野原のような東京、二度と戦争をしない、戦後は平和国家と国際貢献へ、という「ナラティブ」になっている。その途中で北海道とアイヌ、琉球王国、沖縄、在日コリアン、女性、被差別部落の人々への差別と人権へと中学以後扱うことが触れられている。

「外国」「外国人」の話はいたるところに、上記の流れの中核で、古くから交流のあった中国、朝鮮半島、鎖国でも交易のあるオランダ、不平等条約とイギリス、アメリカ…というように出てくる。だがそこにあるのは、船に乗って行く「外国」とそこで会う「外国人」、海を渡ってくる「外国人」であり、対岸の人々である。

そして問題は、「現代」同様、「歴史」部分のグランド「ナラティブ」もまた現代日本社会の多様化を反映せず変わっていないことである。基本的な日本史のナラティブは基本的に何世代も戦後世代が習ってきたものであり、そこに「外国人観光客」とかが付加されているという、周辺部分における修正となっている。

日本社会自体は多文化化し、定住・永住する「外国人」、つまりエスニック・マイノリティも難民も前よりは多く住み、国際結婚も増えているが、社会科教科書のナラティブは従来のものをベースとし続け、その意味では多様化する現実とはどんどん乖離してゆく。

### 従来型ナラティブの問題点

では、小学校社会科教科書の自国内は同質性の高い「国民」＝「日本人」を想定し、外のものとして「外国」「外国人」とつなぐという外向きナラティブの何が問題なのか。

第一に、日本のカリキュラムの特徴により、小学校で関連するカ所で頭出しがされない話題は、中学校以後に教科書に登場させることが、従来型ナラティブにおいてそもそも日本社会内部の「外国人」の話題が多文化の共存と結びつけられていない中では、新たに中学校で取り上げるのが難しくなると思われる点が指摘できよう。日本のカリキュラムの構造はらせん状であり、社会科を例にとると、小学校段階の教科内容を繰り返しながら中学校以後深めてゆく。つまり、グラインド・ナラティブは小学校で終わらず、中学校でより詳細になってゆく。小学校だけではなく、高等学校まで、また、受験の度にグラインド・ナラティブの主要構成要素（例教科書に出てくる人名や事件）が試験で試され、定着することが求められる「事実」となる。一方、「外国人」達は多くの場合、国籍も民族もなくひとまとめに「外国人」として描写され、実際は日本国籍のエスニック日本人であってもナラティブの主役の一人としては語られていない。これは、現在の社会科の外向き「ナラティブ」では日本の国造りの中でエスニック系移民が主役として位置づけにくいことが関係しているのではないかと思われる。彼らが登場するためには、グラインド・ナラティブ自体が、「多様な民族・国籍等の人々が住む」多文化社会日本の形成や実現に向かってシフトしないといけない。

第二の問題点は、実際には既に多くの多様な民族的背景を持つ人々が日本に定住しているという現実があり、これからますます多様な人々と一緒に共生してゆくための知識やスキル、価値観が二十年後、三十年後に活躍する今の日本社会に住む子ども達（「日本人」だけではなく）には必要とされている時に、エスニック・コミュニティで育つ子どもも、難民も、「外国人」と総称し、日本の外の人々のこと（自分事でない）であるような意識を醸成していることであろう。日本の教育は国際的に多くの長所を持ち、評価もされている面も多い。しかし、同時に、国際化と多文化化への対応の遅れは、日本の教育のアキレス腱である（恒吉&額賀, 2023）。

従来の日本の教育に欠けていた多文化社会としての日本の認識、隣人としての異文化的背景の人々との共生は、グローバル時代においては国境を越えて求められるグローバルな資質であり、これから日本や世界で育つ子どもが生きてゆくために最も必要な知識・スキルやマインドセットの一つであろう。OECDやユネスコ等の国際機関や各国教育関係者もグローバル・コンピテンシー、グローバルなスキルについての議論を交わしているが、グローバルな多様性につながるローカルな文化的多様性の尊重は、どこでも支持されている。

日本でも様々な母体がいわゆる「多文化共生」を唱え、経済界も例外ではない。

外国人の定住化が進む現在、外国人を観光客や一時的滞在者としてのみならず、生活者・地域住民として認識する視点が日本社会には求められており、外国人住民への支援を総合的に行うと同時に、地域社会の構成員として社会参画を促す仕組みを構築することが重要である。すなわち、従来の外国人支援の視点を超えて、新しい地域社会のあり方として、国籍や民族のちがいを超えた「多文化共生の地域づくり」を進める必要性が増しているのである。前述のように、今後、日本の総人口は急速に減少していくことが予想される。グローバル化の進展により、人の国際移動がますます活発になる中で、社会の活力を維持するためには、外国人を含めた全ての人々が能力を最大限に発揮できるような社会づくりが不可欠であり、地域において多文化共生を推進する必要性はより一層高まることとなる。

(総務省, 2006, p.5)

注) なお、ここでは「地域における多文化共生」を「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」としている。

地域レベルでは、「多文化共生」が目の前で展開していて必要であるとされながら、全国で使われる社会科教科書が一時代前の外向きの多様性を認識しながらも内なる多文化化を語らないグランド・ナラティブに縛られ、それがこれからの児童が国内的にも国際的にも必要なグローバルでもあるが、ローカルでもある多文化的な知識や資質を日本の教育で扱うことを難しくしているとすると、問題であろう。

第三の問題点は、グランド・ナラティブが事実上、異なる民族、宗教等の人々の「排除」の論理ともなりうる点である。教育を、国民国家のもとでの厳密な「国民教育」だとするならば、「外国人」は外国籍であると考えることによって、国民教育が主として学ぶべきものから排除するという論理になりうる。しかしここで多文化化する日本の現状と今時点で矛盾が生じ

ている。日本では国籍が重視され、国籍と民族とがしばしば相互補完的に捉えられてきた。だが、両者は同じではない。日本国籍を持ちながら親が外国の出身であったり、日本に来て帰化して民族・宗教的にマジョリティと違ったり、「外国につながる」という言い方がされたり、「国際結婚家庭などを中心に、日本国籍ではあるが、日本語指導を必要とする児童生徒も増加して」いる（外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議, 2020, p.2）中で日本国籍の日本語指導を受ける子どものデータが増えたり、日本でも「日本人」対「外国人」の二律背反的な考え方は現状に合わなくなっている。国内的にも多文化化が進み、国際的にも国民国家を越えてゆくグローバル化が現に進行している中で、従来の厳格な国民国家の枠組みを用いて国内を同質的だと想定していることは、現実の多文化化を考慮しない論理ともなりうる。

国際移動が難しかった時代のグランド・ナラティブが、これから二十年後、三十年後に世界を担う子どもたちの将来のニーズに対応しているのか、多文化社会日本を生きる子どもにどのようなメッセージが必要なのか、現在の諸教科の中でどのようにそれを発信してゆくのか、この問題提起してゆく必要がある(4)。

(注)

(1)「日系人」を例にすると文部科学省ホームページ。「学びの支援コンテンツをたくさん知りたい!」「日本と中「南米をつなぐ日系人」、「日本と中南米」(外務省)

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/japan\\_latnamerica.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/japan_latnamerica.html) (中南米日系社会、移民史について)。

[https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/j\\_latnamerica.html](https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/pub/pamph/j_latnamerica.html) (日本と中南米との関係)。

(2)プロジェクトはヨシイ・ラファエラ、上原菜緒子、恒吉藍が在日ブラジル人コミュニティ調査を行った。

(3)ブラジル日報(2022)《記者コラム》日本の教科書に出始めた南米移民=今は地理中心、歴史はこれから?『ブラジル日報』2022年3月8日、

<https://www.brasilnippou.com/2022/220308-column.html>、2023年12月入手。ニッケイ新聞(2003)「南米移住史を教科書に」=京都歴史教育者協議会=本庄氏が伯=専門誌に移住史特集=「学校で学ぶことが重要」2003年9月4日。

<https://www.nikkeishimbun.jp/2003/030904-71colonia.html>。

(4)本論文は、多文化社会日本の「見える化」を目指す一般社団法人グローバル多文化社会研究所のプロジェクトと関係している。補助教材の開発等を進めている。

### (参考文献)

- Delfattore, J. (1992) *What Johnny shouldn't read: Textbook censorship in America*. New Haven: Yale University Press.
- FitzGerald, F. (1979) *America revised: History schoolbooks in the twentieth century*. Boston: Little, Brown and Company.
- 藤原孝章 (1994) 『外国人労働者問題をどう教えるか—グローバル時代の国際理解教育』 明石書店。
- 外国人児童生徒等の教育の充実に関する有識者会議・文部科学省 (2020) 「外国人児童生徒等の教育の充実について (報告)」 3月発行。 [https://www.mext.go.jp/content/20200326-mxt\\_kyousei01-000006202\\_02.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200326-mxt_kyousei01-000006202_02.pdf)、2024年1月入手。
- Hunter, J.D. (1991). *Culture wars: The struggle to define America*. New York: Basic Books.
- 森茂岳雄&中山京子編著 (2008) 『日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ』 明石書店。
- 森茂岳雄&中山京子 (2011) 「移民学習論—多文化共生の実践にむけて」 日本移民学会編 『移民研究と多文化共生』 明石書店。
- 中山京子 (2012) 「社会科における多文化教育の再構築 — ポストコロニアルの視点から先住民学習を考える 」 『社会科教育研究』 116: 35-44。
- 日本経済団体連合会 (2022) *Innovating migrating policies--2030年にむけた外国人政策のあり方*。 [https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/016\\_honbun.html](https://www.keidanren.or.jp/policy/2022/016_honbun.html)、2024年1月入手。
- 清水陸美&児島明&角替弘規&額賀美沙子&三浦綾希子&坪田光平(2021) 『日本社会の移民第二世代—エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』 (世界人権問題叢書) 明石書店。
- 総務省 (2006) 「多文化共生の推進に関する研究会報告—地域における多文化共生の推進に向けて」 3月。 [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000539195.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000539195.pdf)、2024年1月入手。
- 総務省統計局 (2024) 「人口推計 (2023年 (令和5年) 10月1日現在) —全国：年齢 (各歳)、男女別人口・都道府県：年齢 (5歳階級)、男女別人口—」 2024年4月12日公表。 <https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2023np/index.html>、2024年4月入手。
- 多文化共生の推進に関する研究会・総務省 (2020) 『多文化共生の推進に関する研究会報告書—地域における多文化共生の更なる推進に向けて』 総務省、2020年8月、 [https://www.soumu.go.jp/main\\_content/000706219.pdf](https://www.soumu.go.jp/main_content/000706219.pdf)、2023年12月入手。
- Tsuneyoshi, R. (2007). The portrayal of "foreigners" in Japanese social studies textbooks: Self-images of mono-ethnic pluralism, *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, No. 2, pp. 31-44.
- Tsuneyoshi, R. (2019) Discussing the "multicultural" in Japanese society (177-195). In Omomo, T., Katsuno, M. and Kitamura, Y. (Eds.) *Education in Japan: Reforms of education governance and quality assurance*. Singapore: Springer.
- VanSledright, B. (2008) What Counts as Knowledge in Educational Settings: Disciplinary Knowledge, Assessment, and Curriculum, *Review of Research in Education* 32: 109-146.
- 柳準相 (2023) 「小学校社会科における「国際教育」の内容と特徴 —学習指導要領の内容構成と教科書記述の分析を中心に」 『東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室 研究室紀要』 49:189-199.

恒吉僚子&ヨシイ・ラファエラ&上原奈緒子&恒吉藍 (2024) 「小学校社会科教科書の内容分析：多文化社会日本を探る」



©2024 一般社団法人グローバル多文化社会研究所  
<https://www.gmsresearch.org>